

2021年1月10日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「まことの友になりたい」

聖書：マルコによる福音書2：1～12

この物語にタイトルを付けるとしたら「友情物語」としたい。《四人の男が中風の人を運んで来た。しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかった…》イエスに癒してもらいたい、ただその一心で、イエスのおられる家の屋根をはがす。そこまで中々できることではない。そこに彼らの友情を見る。イエスはこの状況を見て、「罪の赦し」の宣言をする。

何故、「罪の赦し」の宣言か？当時、病は罪の表れとして見ていた。ただでさえ病や障がい、苦しんでいる者に“お前は罪人だ”とレッテルを貼られてしまう。その言い伝え、律法の解釈がまかり通っていた。イエスはそのことに対して激しく立ち向かう。「罪の赦し」の宣言は、「あなたの病は決して罪によるものではない、病があっても罪赦されている者として堂々と生きていい」という意味を含んでいる。そのことは何も聖書の世界だけの話ではない。今の社会でも良く聞く話。

イエスは本来なら、「罪の赦し」の宣言で終わろうとしていた。しかしこの後に次の展開を見せる。イエスは、律法学者の心を見抜き、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」と言って病の癒しの業に移る。ここでの病の癒しは、あくまで「罪の赦し」の宣言を強調するため、あなたの罪は赦されている、決してあなたの病は、罪によるものではないとの強調。

もう一つ。《イエスはその人たちの信仰を見て》、「罪の赦し」の宣言をする。イエスにとって罪の赦しとは何を意味しているのか？他人の信仰によって罪が赦されるということなのか？ここではそういうレベルの話ではない。「信仰」は、「誠実さ・ひたむきさ」という意味を持つ。ここで四人の友が病を患う友のことを思い、懸命に努力している様子を見て、イエスは「あなたの罪は今、赦されているじゃないか。その人間関係の美しさこそ、罪の赦しに他ならないんだ」と言われたのではないか。

「友を助けたい」という「誠実さ」「ひたむきさ」に対して、その美しい人間関係、本来人間が持つべき、「関係の回復」がここにある。

先週、饒平名長秀牧師が召された。私にとっては信仰の大先輩だが信仰の友として歩ませて頂いた。名護牧師にとっては、まさに信仰の友であったことだろう。どんなにか寂しいことかと思う。昨日、ハワイのランドール先生にお電話し、饒平名先生逝去の報告をした。しばらく沈黙され、その悲しみが伝わってきた。

“信仰の友”という時、私たちの最大の友は、イエス・キリストご自身である。イエスは「まことの友になりたい」とあなたの側にいる。主の慰めがここにある。(神谷)